

ものゝふと心あはして巖をもつらぬきてまし世々のおもひで

同月廿三日

書

日々のふみにつけても國民のやすき文字こそ見まくほしけれ

同年十一月十六日内侍所御法樂

竹雪深

國のことふかくおもへといましめの雪のつもるか園のくれ竹

元治元年正月廿四日御會始

梅花薰簾

のどかなる春のうてなとはなやかに梅の薰をこむるたまだれ

同年四月弘前侍従より正宗の刀を獻りけるに

いく世にもめでなぐさまむ名もたかき玉の刀に玉のつくりは

津輕家藏宸筆に「弘前侍従より名だかき正宗の刀みごと

につくりなし送りこすとてよめる」と端書せさせ給へり

同年五月廿一日宇佐八幡宮に奉らせたまへる五十首

春十首

立春

天が下のどかなれども立ちそむる春のひかりは四方に隔てじ

海霞

波のうへの遠くかすみて道ひろき春の色あるわだのはらかな

若菜

春の色は野澤にみちぬ諸人のいざやわかかなを摘みもはやさむ

洛鶯

まだ咲かぬ花をいそぐや花の名の都にきゐるうぐひすのこゑ

梅盛

わかざりし雪はのこらず梅が枝は色香ばかりの今さかりなる

春雨

ながき日に降るぞこの世のためなるか草木もめぐむ春雨の空

朝花

朝日かげさしそふ枝のさくら花ひときは色のまさりてぞ見ゆ

遅日

よるづこと怠らずせむ春の日のめぐり遅きをあだにくらさで

歎冬

春の日かざいざこえぬべき垣根にも色はふりせぬ山ぶきの花

惜春

花は根に鳥はふるすにかへるなり名残も惜しき春のくれかな

夏七首

更衣

あしき事はかくあらたまれ夏きぬと花にそめしもかふる衣手

郭公

いつまでか心づくしの時鳥待たさではやく名のれとぞおもふ

砌橘

五月雨の降りしめるともしめらずもみぎりにふかくにほふ橘

梅雨

ながくともかぎりはありぬ梅の雨さりとして晴れよ異國のうさ

夏月

おのづから蚊の聲とほし夏の夜やたゞ涼しさの月にあかさむ

納涼

木々の風落ちて流るゝ水のおともへだてず涼し夏のゆふぐれ

夏祓

身につもるうきをば今日に夏祓いさや涼しきよをわたらなむ

秋十首

籬萩

憂きを隔てよきおとづれを萩の風おなじ籬にわきてきかせよ

萩露

萩の戸の花にいく秋かけぬらむ神のめぐみのふかきしらつゆ

徑薄

ほそくともすぐなる路にまねけかし秋風おぶる花すゝきども

叢蟲

草むらのくさく物と思ふとは蟲さへ知りて音にや鳴くらむ

初鴈

嶺あまた越えくるこゑも初鴈はしづけき秋のみやこしたふか

橋月

ながむればながるゝ水にかげうつしくまなくわたる月の板橋

搦衣

音にたてゝもゝたび千たびうてやうて寒きをわざの賤が狭衣

葛風

厭ふ物ば風にしられてとにかくに葛の裏葉のふきもかへさる

紅葉

時をしる秋のいろとて野も山もつゆと霜とに染むるもみぢ葉

暮秋

長月のながきもいつかおくつゆの霜とぞならむ秋のくれがた

冬七首

時雨

よき風につれてしぐるゝ雨ならば寒けきとても厭はざりけれ

落葉

時へぬる色にしあるかな木々の葉は風吹く跡に散りもこそすれ

千鳥

難波潟あしの霜がれさはくくとゆふなみ千鳥むれてたつなり

深雪

風さへもしづかなりける冬の庭ひかりくもらず雪のつもれば

鷹狩

ねがはくは心のまゝのえものせむかく思ひこみかりす野山に

神樂

ひたすらにめぐみの程を肩にかけおもひ一つのからかみの舞

除夜

わざはひは葦の矢をもてなやらふも春待つ業の今夜なりけり

戀十首

戀鏡

かばかりに思をうつすます鏡むかふがごとくいつか逢ふらむ

戀枕

いくたびか枕の塵をはらへども戀のこゝろのさりやらでうし

戀衣

袖かるくかふる衣もおもきかななみだにぬれて戀すてふ身は

戀硯

おもひあまり硯の海のひるまでもかけどかひなき中の玉づさ

戀琴

琴にかゝるその絲筋の結ほれず思ひとけたる音をや立てなむ

戀笛

笛竹のよを重ねけりいつしかはあな嬉しとも吹きならしてむ

戀弓

つよき弓に心ぞつくすその人をおもふ戀路にひきもよせむと

戀扇

扇てふ名にし習ふと知るならばちよろづまでも人をまねかむ

戀燈

燈火は消えなむとすれいつまでか闇にこがれて残るうき身ぞ

戀舟

おもふ方にはや漕ぎゆかめ吹く風のたよりもしらぬ戀の浮舟

雜六首

山家

さびしさはとまれかくまれ山里にすみつる身こそ心やすけれ

關屋

歎かはしをさまれる世の關屋にもまた心つくる人のありとは

浦鶴

あしたづのあしきは知らず住吉のうらわの松に千世よばふ聲

述懷

天が下人といふ人こゝろあはせよるづのことに思ふどちなれ

神祇

たてまつるそのみてぐらをうけまして國民安くなほ守りてよ

祝言

松の葉のかずならずとも祈るにもさかえをとほの秋つすの國

同年九月十日

述懷

さまざまになきみわらひみ語りあふも國を思ひつ民思ふため

同年十一月廿二日仙臺中將より鞍置の駒をたてまつ

りけるに

みちのくの國のつかさの心あればみつぐもみづのいさぎよき駒

伊達家藏宸筆に「仙臺の中將よりくらおきの馬おくり

こすとして」と端書せさせ給へり

慶應元年正月廿四日御會始

南枝暖待鶯

梅柳松もひとしほはるめきぬこゝろよる枝にきなけうぐひす

同年二月十六日内侍所御法樂

心在山花

願はくはこゝろしづかに山の端の花見てくらす春としもがな

同年九月十一日神宮御法樂

獨述懷

人しらずわが身ひとつに思ひつくす心の雲のはるゝをぞ待つ

同二年正月廿三日御會始

青柳風靜

青柳をうたふこゑにもよりあはせ風やはらかになびく絲すぢ

同年七月十五日石清水社御法樂

秋鳥

よきことを告げもきたれよ天つ鷹みやこの秋の契りたがへず

同月廿一日内侍所御法樂

月照瀧

もつれなき瀧の絲すぢあらはして岩根に月のてりまさるかな

〔以上孝明天皇紀〕

孝明天皇紀安
政五年七月十
一日神宮御法
樂、述懷の御
製と同歌なら
歟、

すましぬし水にわが身は沈むともにごしはせじなよろづ國民
くらゐ山神のこゝろはいかならむ愚なる身のをるもくるしき
戈とりてまもれ宮人こゝのへのみはしのさくら風そよぐなり
あぢきなやまたあぢきなや葦原のたのむかひなき武藏野の原

歴代御製集卷二十三終

歴代御製集卷二十四

明治天皇

春

立春

日はいまだ長からねども春立つとおもふ心ぞのどけかりける

立春霞

東山たかねのこずゑうらくとかすむや春になりしなるらむ

立春梅

立つ春の朝日をうけてわが庭の梅のほづえもゑみそめにけり

春風解氷

明治天皇

朝日かげさゝぬ汀もうすごほりうちとけそめて春かぜぞ吹く

氷解

山川のこほりながるゝ音すなり春のいたらぬかたやなからむ
いろくづもうれしと今かうかぶらむ池の氷はとけそめにけり

野初春

武蔵野は雪もけなくに朝がすみたなびきにけり春のしるしに

初春鶯

梅の花ふゝむ垣根にきこゆなりまだとゝのはぬうぐひすの聲

初春梅

花はまだ匂はぬ梅の木のもとにたちいでゝ見る春は來にけり

田家早春

今朝もまた霜ぞふりける賤が家の畑の麥生はみどりなれども

早春雨

春雨ののどかなる日になりにけり柳も萌えむうめもかをらむ

早春松

うちなびく霞や色をそへつらむ松のみどりもあらたまりけり

早春柳

朝霜のとくるしづくもさむからず柳のえだはまだ萌えねども

山霞

春日野のわか草山のあさみどりかすかに見えてかすむ春かな

行路霞

つゝみゆく人のくるまの音はしてかすみをぐらき河ぞひの道

海邊霞

かぎりなき大海原の波のうへにたなびきわたる春がすみかな
磯菜つむをとめが聲ぞ聞ゆなるなきさの松のかすみかくれに

遠島霞

しま山も霞のおくにかくろひていよ／＼ひろし春のうなばら

霞隔遠樹

うちわたす河原の野へのやなぎ原みえずなりけり霞へだて、

霞隔行舟

ゆきちがふ小舟もけさは見えぬかなわくる浪路のふかき霞に

待鶯

はなぞのに待てどきなかぬ鶯は谷ぶところやはなれかぬらむ

我もまた程なく聞かむうぐひすの初音なきつと人のいふなり
この春は遅くやあらむうぐひすの初音きゝつといふ人のなき

鶯未出谷

待てど／＼まだ世に出でぬ鶯は谷ぶところやはなれかぬらむ

鶯

このごろは垣根のやなぎ軒の梅みなうぐひすの宿となりぬる

初鶯

春立つといふより待ちし鶯のこゑたてそむるあさぼらけかな

曉鶯

あかつきの風さむからずなりぬらしねぐらながらに鶯の鳴く

朝鶯

朝なくかならずきなく鶯を聞きもらしけりことしげくして
うぐひすの鳴く初聲にゆめさめて心うれしきあさぼらけかな

朝聞鶯

今朝はまたいづこの梅にやどるらむとほくきこゆる鶯のこゑ

夕鶯

暮るゝまで庭にさへづる鶯はながき春日もあかずやあるらむ

谷鶯

おく山の谷のうぐひす出でゝ鳴けみやこの梅は今さかりなり

竹裏鶯

たかむらのおくにこもりて鶯は花のえだにもうつらざりけり

霞裏聞鶯

咲きそめし花や尋ぬる春山のかすみかくれにうぐひすの鳴く

柳間鶯

あさみどりやなぎの枝にうつりきて鳴く鶯やのどけかるらむ
わが庭のしだり柳のかげ深みねぐらしめてもうぐひすの鳴く

山家鶯

春さむきところと聞きし山里も時におくれずうぐひすの鳴く

故郷鶯

花の木も老いはてたりし故郷にむかし忘れずうぐひすの鳴く

河邊鶯

川岸の柳のいとのがき日をこづたひくらすうぐひすのこゑ

山行路鶯

野も山も春になるらし玉鉾のみちのまに／＼うぐひすの鳴く

馬上聞鶯

うぐひすの聲する方にいこへとやさきだつ人の駒とゞめたる

鶯呼客

招かむとおもひし人をよびとめて鳴くうぐひすは心ありけり

一人のみ見るがさびしき花蔭に人よびがほにうぐひすの鳴く

鶯馴

うぐひすは里なれにけり窓の戸をあくるおとにも驚かぬまで

鶯遅

ちりがたになりにし梅もあるものをなど鶯のこゑのきこえぬ

鶯聲和琴

玉琴の音にひかれ来てうぐひすも小簾のと近く聲あはすらむ

英照皇太后宮京都へ行啓のをりに

うぐひすも聲とくひらけのどかなるみなみの國の梅の色香に

雪中若菜

初若菜人のつみけむあとばかり雪きえにけり野邊のかよひぢ

山残雪

いまもなほ降りやそふらむ北山の雪のけしきは冬にかはらず

みよし野のよし野の山は雪しろし花まつ春になりけるものを

山路残雪

わらび折るころになりぬと思ひしをまだ雪ふかし山かげの道

谷残雪

春雨のふりしのちまでのこりけり谷の岩根につもるしらゆき

山家残雪

しら雪の消えし垣根もなかりけり山にはいまだ春やこざらむ

松下残雪

下かげに雪ものこりて吹きおろす松かせさむし岡ごえのみち

月照残雪

消えのこる松の木かげのしら雪にさす影さむしありあけの月

春雪

梅見にも思ひたゝむとおもひしをまたさえかへり泡雪のふる
ふるがうちにかつ消えはてゝ泡雪は梅の花にも障らざりけり

餘寒

大空はまたも雪げになりにけりいつかは花のふゝみそむべき

餘寒風

さえかへる春の嵐はみゆきふる冬にまさりて身にぞしみける

餘寒霜

もえいでし二葉の小草寒からむ見えぬ霜のふれゝば
咲きみちし梅の木かげに霜見えて春なほさむし山もとのさと

餘寒雪

花を待つ梢にけさはあわ雪のふりかゝるまでさえかへりけり
春さむき年としられてふる雪もおもひの外につもりけるかな

梅始開

梅の花さきそめしより風さむきあしたも庭に出でゝこそ見れ

雪中梅

盛にもならむとしたる梅が枝にまたしら雪のふりかゝりけり

霞中梅花

なつかしき梅が香すなりまどのとかすみはてたる春の朝に

朝梅

朝がすみ匂へる庭の木の間よりあらはれそめぬ梅のひとつと

夕梅

夕風のさむき垣根にひとりのみかをれる梅のいとほしきかな

山家梅

山ざとの軒端の梅は咲きにけりかけひの水はまだこほれども
山里も梅のさかりになりにけりみやこの春やさかりなるらむ

田家梅

わらむしろしきたるしづが袖垣も梅のかをりになれる春かな

故郷梅

うゑおきし一木のうめの花のみは春になりけりふるさとの庭

水邊梅

あさごほりとけて流るゝ川岸にさゝなみよせて梅さきにけり

窓前梅

ふづくゑの塵はらはむと窓の戸をあくれば梅の花の香ぞする

梅盛

風さむきあしたもあれど梅の花さきのこりたる方なかりけり

尋梅

道とほく思ひしものをいとはやも梅のはやしに我はきにけり

折梅

手折らむとおもひて見れば梅の花蕾もいまだすくなかりけり
てずさびに一枝をりぬ梅の花にほふはやしをゆきかへりして

翫梅

たちよりにて折らむとおもふ庭のおもの梅のこずゑに鶯の鳴く

翫梅花

梅の花さきそめしよりおほかたの人のこゝろも春になりけり

鞆中見梅

ふるさとの春はさかりになりぬらむ旅寝の宿の梅さきにけり

遠村梅

山もとのさとも春にやなりぬらむかすみかくれに梅の花見ゆ

若木梅

うゑそへし若木の梅の嬉しくも去年より花の咲きまさりけり

梅遠薫

ふみわけし我をおくりて梅の花遠ざかるまでかをりきぬらむ

梅香薰袖

春風のさそふと思ひし梅が香のうれしく袖にとまりけるかな

梅香何方

目に見えぬ風をたよりに梅の花かをる木かげを尋ねけるかな

梅有遅速

ときおそきかげこそ見ゆれ梅の花同じ春日のひかりうくれど

散るもあり蕾もありてゆきかへり見れどもあかぬ梅のはな園

水邊柳

汀にはつのがむあしも見えそめて澤邊のやなぎ春かぜぞ吹く

遠村柳

青柳のもえしなるらむうちわたす里の垣根のくらく見ゆるは

草漸青

立ち出でゝ見るたびごとに若草の緑ふかくぞなりまさりける

深山蕨

みよし野のみすゞが下の早蕨も賤に折られて世に出でにけり

樵路蕨

やすらひしひまにやしづが折りつらむ眞柴にそへし春の早蕨

歸鴈遙

いづくより立ちしなるらむ歸る鴈とほざかりても聲の聞ゆる

春鴈離々

うちつれてわたりし友にあらざらむはなれとくに歸る鴈がね

春日

菅の根のながき春日はなかくに物におこたる人ぞおほかる

春夕

入相のかねのひゞきはきこえてもさびしからぬは春の夕ぐれ

春夢

春の夜はまださむけれど咲く花のかげに遊べる夢をみしかな

春眠不覺曉

曉によはなりぬとも知らざりき春のねぶりのさめがたくして

川邊春月

玉川のきよきながれにやどりてもなほおほろなる春の夜の月

雪後春雨

消えのこる軒端の雪もとけぬらむふる春雨のおとのどかなり

山路春雨

くれぬとて山路をいそぐ旅人のそでしづかにも春さめぞふる

花盛

駒なべて行く人おほしたが里も花のさかりになりやしつらむ

見花

つかさ人さゝぐるふみは多かれど花見る程のひまはありけり

霞中花

山ざくら匂ふあたりに朝な／＼たなびきわたる春がすみかな

風前花

春かぜの吹きのままに／＼散りくるはいづこの庭の櫻なるらむ

磯邊花

あらいその松の木かげに汐風をよきても咲ける山ざくらかな

月前落花

あかつきの月こそくもれ山ざくらこそずゑに残る花や散るらむ

山路落花

散る花のふゞきもさむきゆふべかな苔のつゆふむ山のした道

浦落花

きのふけふ春もふけひの浦風に波路をかけて散るさくらかな

遅櫻

おく山の青葉がくれのおそざくら春におくれし色としもなし

春野

こゝかしこ花咲きにけり野邊ひろみ枯木も稀に思ひしものを
子等は皆野邊の遊にいでにけりもえし小草はすくなけれども

野春風

すゞな咲く野邊の中道あさゆけば露もこぼれて春かぜぞ吹く

雉子

朝がすみたなびきわたる春の野の小松が原にきゞす鳴くなり
狩人は立たずなりにし春の野に子を思ふ雉の今朝も鳴くなり

岡雉子

わらび折る人もかへりし片岡にきゞす鳴くなり春のゆふぐれ

雉思子

子をおもふ焼野のきゞす春の夜の夢もやすくは結ばざるらむ

雲雀

遠近にあがる雲雀のこゑすなりうかれごゝろは人ばかりかは
うらくと霞わたれる春の野にそこともいはず雲雀なくなり
あくがるゝ人の心をひさかたの空にさそひて立つひばりかな

野雲雀

空たかくあがる雲雀の聲すなりすみれ咲く野を人にゆづりて

雲雀揚

春の野の霞はいまだくらくれどあがる雲雀のこゑのきこゆる
のどかなるあしたなるかな大空にあがる雲雀の聲ばかりして

春駒

親のあとしたふなるらむ若駒のひとりは遠くあそばざりけり

春蝶

若草の露あたゝけくなりぬらし野邊にこてふの遊びそめたる

雨中苗代

ふる雨に小笠とりどしづのをが水口まつる小田のなはしろ

松上藤

老松のえだにかゝりて咲きにけりわかむらさきの藤なみの花

瀧邊藤花

こだかくもしげれる松をつたひきてたきつ岩根にかゝる藤波

春海

岩づたひ人こそあされわたつみの潮干がりせむ時や來ぬらむ
さくらだひつりする蟹がこゑばかりかすみにのこる春の海原

春湖

諏訪のうみの氷も今はとけぬらしかすみわたれる信濃路の山

春旅

遠近の野山のさくら見つゝゆくはるの旅路ぞたのしかりける

折にふれたる

うらくとかすむ垣根を見わたせば竹の林にうぐひすの鳴く
我が國のさくらのもとに咲きいでゝ色こそはえねから桃の花

たひらかに世は治まりて國民のともにたのしむ春ぞうれしき

夏

首夏朝

ぬぎかへし袂にかよふ朝かせのうらめづらしき夏は來にけり

海邊首夏

若葉さす磯山かげにうちよする波のおとすゞし夏や來ぬらむ

谿新樹

花時はさむしといひてとはざりし谷のさくらも若葉さしけり

杜鵑

ほととぎす鳴く一聲のうれしさに今見し夢をわすれけるかな

月前時鳥

このゆふべ村雲はれてほととぎす涼しき月のかげに鳴くなり

雨中郭公

夏山の若葉なびきてふる雨のすゞしきくれに鳴くほととぎす

郭公稀

たまさかにきなけばこそは時鳥あまたの人にめでられにけれ

橘

窓ちかく花たちばなは薫れども山ほととぎすいまだきなかず

故郷橘

たらちねのみおやの御代の古事を思ひぞ出づる庭のたちばな

御苑に咲きたる紫陽花を見そなはして

いづれをかまことの色と定めなむ日ごとに變るあぢさゐの花

川梅雨

さみだれにつゝみを水やこえぬらむ舟にてかよふ川づらの里

川邊梅雨

さみだれに水のあふれてものをみな舟にてはこぶ川づらの里

曉更鶏

空音かと思ふばかりに夏の夜のあけがたはやく鳥がねぞする

深夜水鶏

とのゐ人語らふ聲もたえはてゝ更けゆく夜半に水鶏なくなり

水邊夏草

ゆく水はてる日にかれていさゝ川風に波よるすゝきかるかや

夏花

もゝかさく花まばゆくも見ゆるかな今やあつさの盛なるらむ

夏草露

明治八年八月九日來十六日八田知紀三年祭歌會
兼題を聞きしめて會主侍從番長高崎正風に賜ふ

言の葉もともにしげりし夏草の露と消えしも名はのこりけり

水邊瞿麥

よる波にうちあげられてふしながら花咲きにけりかはら撫子

撫子露

はらはざば思はぬ方にかたぶかむ露おきあまるなでしこの花

夏風

わが庭の松を吹きこす朝風にねぶりもさめてすゝしかりけり

池夏風

池水のみぎは吹きこす朝かせにはちすの花の散るも見えつゝ

夏雨

あらがねの土さへさくる日ざかりにあなこゝちよや今の村雨

夏朝

朝のまにも學ばせよをさなごも晝は暑さにうみはてぬべし

夏夕

庭草に水そゝがせて月を待つなつのゆふべはおもふことなし

夏夜

更くるまで涼み過して夏の夜は閨に入るまもみじかゝりけり

田家夏月

瓜ばたにおりたつ人も見ゆるかなしづがかきねの夏の夜の月

樹蔭夏月

吹く風も涼しき杜の木のみよりひかりをもらす月のかげかな

高樓夏月

大ぞらに風をさそひてたかどの窓にさし入る月のすゞしさ

砂月涼

すゞしくも月のひかりになりにけり波のあらひし濱の眞砂路

夏月易明

今しばし涼まゝほしく思ふとも知らでや月のかたぶきぬらむ

夏星

星のとぶ影のみ見えて夏の夜もふけゆく空はさびしかりけり

池蓮

白鷺のおりたつ方も見えぬまで池のはちすは茂りあひにけり

蓮露

ながくなりまどかになりて蓮葉にまろぶもすゞし露のしら玉

海上夕立

わだの原おひてをうけてゆく舟の片帆にかゝるゆふだちの雨

川夕立

水上やゆふだちしけむ谷川のながれみなぎるおときこゆなり

行路夕立

あまぎぬをかくるまもなく行く人の車にかゝるゆふだちの雨

旅夕立

旅人を野邊にのこして夕立はたかねはるかに越えてけるかな

旅宿夕立

野道にてあはざりしこそうれしけれ旅のやどりにかゝる夕立

蟬

水無月のてる日のかげはさしながら時雨にまがふ蟬の聲かな

松上蟬

鳴く蟬のこゑばかりして吹く風の音はたえたり岡のまつばら

行路蟬

風わたる木かげをかよふ小車のとまれば蟬のこゑきこゆなり

馬上聞蟬

日をさけて松の木かげをゆく駒のうへになきたつ蟬の聲かな

蟬聲滿耳

かたはらの人のいふこと聞きとれず蟬の聲のみ耳にひびきて

耳ちかくなきたつ蟬に遣水のすゞしきおともきこえざりけり

川鮎

玉川のはやきながれの底すみてさばしる鮎のかずも見えつゝ

扇

日ざかりは筆とる事もものうくて扇をのみぞ手ならしにける

扇不離手

扇のみ手にならしつゝ日盛はふでをもえこそとられざりけれ

竹風涼

ふづくゑのうへに夜露もちりそめてすゞしくなりぬ竹の下風

對月待秋

蟲の聲きかむ秋こそ待たれけれすゞしき月のかげにむかひて

海邊夏

伊勢の海のきよき渚にうちよする浪の音こそすゞしかりけれ

夏山水

年々におもひやれども山水をくみてあそばむなつなかりけり

夏山家尋人

夏山のくさのいほりをとふ人は卯の花がきやしるべなるらむ

夏庭

昨日かもきりおろしたるわが宿の庭樹の枝はまたしげりけり

庭泉

庭の面に清水の音はきこゆれどむすふいとまもなき今年かな

夏池

宵に見しほたるは消えて赤星のかげこそうつれ池水のうへに

夏夢

ぬばたまの夢にふたゝびむすびけりすゞしかりつる松の下水

夏竹

しら露の風にこぼるゝかす見えて朝日すゞしき竹のしたいほ

夏鳥

やり水につばさあらひて日ざかりは鳥も庭をあさらざりけり

夏市

たちつゞく市の家居はあつからむ風の吹き入る窓せばくして

夏人事

窓のうちに扇とりても暑き日にてる日をうけて小草刈る見ゆ

夏舟

日盛に漕ぎつらねゆく川舟はおよぎに出づる子等や乗るらむ

夏車

重荷ひく車のおとぞきこえける照る日の暑さたへがたき日に
さまざまの重荷をつみて日にやけしいさが上を車ひくなり

夏氷

なつしらぬこほり水をば軍人つどへるにはにわかちてしがな
厚氷もちほこぶまにとけぬらむもりしうつはに水のたまれる

夏燈

軒ちかくかけつらねたる燈火のまたゝくほどの風だにもなし

夏硯

時のまに硯の水のかわくにも今日のあつさの知られけるかな

夏述懐

政事いで、聞くまはかくばかりあつき日なりと思はざりしに

折にふれて

つばめ飛ぶかげのみ見えて田うゑどき家に人なき小山田の里
暑しともいはれざりけりにえかへる水田にたてる賤を思へば
晝もなほ蚊のこゑしげし竹村のかげのあづまや涼しけれども

秋

初秋夕

夕づく日かげろふ杜の木がくれにひゞらし鳴きて秋風ぞふく

早秋風

吹く風のおとこそかはれ山の端の松もはじめて秋やしるらむ

新秋雨

露だにもいまだ結ばぬくさむらに一むらそゝぐ雨のすゞしさ

鄰朝顔

いづれよりたねは蒔きけむ中垣のうらおもてなく咲ける朝顔

故郷草花

園守やひとり見るらむむかしわがあつめし庭のあきぐさの花

秋風

あらしとも思はざりしを芭蕉の葉ふきやぶりたり庭の秋かぜ

秋風寒

富士のねに初雪見えてうちひさすみやこもさむき秋風ぞ吹く

垣秋風

枯蔓もいまだはらはぬあさがほの垣根ゆすりて秋かぜぞ吹く

月前風

をちここに尾花なみよるかげ見えて月すむ野邊に秋風ぞ吹く

月前葦

有明の月もさし入る窓のとなにかげさへ見えて鳴くきりトす

海邊蟲

浪の音のとほざかりゆくみきしほに蟲のねたかし濱の松ばら

窓前蟲

草ひばり鳴きもぞやむと秋の夜の月なき窓もさゝれざりけり

仲秋月

雲霧もかゝらざりけりおほぞらに今宵とみてる月のひかりに

野月

松原もをぐらくなりて秋の野のをばながすゑに月かたぶきぬ

海上月

あしびきの山のは出づる月影におほうなばらの浪を見るかな

田家月

をちここに藁うつおともきこえけり山田のさとの秋の夜の月

月不撰所

萩の戸の露にやどれる月かげはしづが垣根もへだてざるらむ

月明星稀

あまの原みちたる星のかげ消えて月のひかりになれる空かな

月前言志

わが心いたらぬくまのなくもがなこのよを照す月のごとくに

夕霧

堤ゆく人がげ絶えてすみぞめの夕ぎりくらししてらじまのさと

海上霧晴

音ばかり聞えし浪の見えそめぬ浦わのさざり晴れわたるらむ

秋夜長

秋の夜のながくなるこそたのしけれ見る卷々の數をつくして

秋燈火

秋の夜の長きにあかず燈火をかゝげて文字を書きすさみつゝ

秋晴

水こえし里のしめりけかわくべく秋のみ空よはれつゝかなむ

馬上紅葉

むちうたば紅葉の枝にふれぬべし駒をひかへむをかごえの道

秋川

落鮎のながるゝ見えてかつら川すみまさりゆく水のいろかな

冬

田家時雨

刈りのこす山田のおくてうちなびき寒き嵐にしぐれふるなり

庭落葉

木枯の吹きたびごとに散りつもる庭の落葉はいくへなるらむ

寒松風

おほぞらの雲をしのげる山松のえだ吹きしをるこがらしの風

寒夜風

窓の戸をたくくあらしの音さむし池のこほりも今かとづらむ

田家霜

しづがやの軒端にたかくつみあげし新藁しろく霜ふりにけり

江寒蘆

難波江のあしの枯葉におく霜のふかくも冬のなりにけるかな

蘆間薄氷

霜がれのあしの葉さやぎ吹く風にむすびそめたるうす氷かな

池厚氷

風さわぐ池のみぎはのあつ氷なみのすがたにむすびけるかな

氷満池上

池水は凍らぬかたもなかりけりいづこか鴛鴦の夜床なるらむ

氷留水聲

山川の水はこほりのとぢはてゝ風のおとのみたかきころかな

池水鳥

さゆる夜の月のひかりに池水のみぎはの鴨のかずも見えつゝ

水鳥聲

葦鴨のむれてうかべる池のおもはつばさの風に浪やたつらむ

曉千鳥

磯崎のなみまに月のかげ落ちてあかつきさむく千鳥なくなり

濱千鳥

汐風をつばさにうけて冬の夜のながはまづたひ千鳥なくなり

霰ふるなり

山かぜに吹きおろされて今日もまたふもとの里は霰ふるなり

風前雪

吹きすさぶ風のまにく誘はれて家のうちまでつもる雪かな

月前雪

月しろくさえたる庭と思ひしはくまなく雪のふれるなりけり

山家雪

山里の軒のかけひのおとはして雪しづかなるあさぼらけかな

田家雪

あしびきの山田の庵の竹ばしらかたぶくばかりつもる雪かな

船中雪

漕ぎ出で、舟のなかより見わたせば雪おもしろしうらの松原

車上雪

賤の男がひとりひきゆく小車の重荷のうへにつもるゆきかな

鷹狩

ふる雪のしらふの鷹を手にすゑて朝がりきそふ冬は來にけり

向爐火

桐火桶かきなでながら思ふかなすきまおほかる賤がふせやを

爐邊述懷

埋火をかきおこしつゝつくどと世の有様をおもひけるかな
ふくる夜の霜ふむ人もあるものを火桶にのみやより明すべき

歳暮近

あらたまの年のをはりも近づきぬ暑し寒しといひくらすまに

待春

春立たむ日はまだ遠しはやざきの梅の木末はふゝみたれども

待早鶯

をさなくも鶯の音ぞまたれけるまだ春かぜも吹かぬのきばに

早梅

梅の花さけるを見ればふる雪に冬ごもる身のはづかしきかな

折早梅

うづみ火のもとにさゝむと折りにけり雪をしのぎし梅の初花

折にふれて

冬ふかき閨のふすまをかさねても思ふはしづが夜寒なりけり
ふる雪を袖にはらひて臣どもと馬はしらする今日のたのしさ

雑

天

あさみどりすみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな
かぎりなきあまつみそらを心にと思ひのどめむ世の中のこと

雲

ひさかたの空にたゞよふむら雲も山の木立ややどりなるらむ

日

さしのぼる朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり

煙

朝煙たちそふすゑに知られけり民のなりはひすゝみゆく世も
あがたもり心づくしの程見えて藁屋のけぶり立ちまさりけり
いぶせくも煙ぞなびくかなぢゆく車のまどをさせといふまに
いとなみはその家々にかはるらむ立つる煙はひとつなれども

塵

つもりては拂ふが難くなりぬべし塵ばかりなる事とおもへど
塵の世に身はまじるとも人みな心はつねにはらひきよめよ

國

よきをとりあしきを捨てゝ外國に劣らぬ國となすよしもがな

水

うつにはしたかひながら巖をもとほすはみづの力なりけり

くろがねの舟もたやすくうごかしてつよきは水の力なりけり

曉

おのづからねむりさめたる曉のしづこゝろには似る時ぞなき

夕

つかさ人まかでし後のゆふまぐれ心しづかにふみを見るかな

雨後山

足引の山の端うすくあらはれぬ日ごろの雨や晴れわたるらむ

峰

大空にぞびえて見ゆる高嶺にもほればのぼる道はありけり

山路

いはがねのこゝしき山をてる日にもたゆまず越ゆる我が軍人

山家眺望

わが山のむかひの高嶺雲はれてあらはれにけり松のむらだち

野

にひばりの畑も田づらもおほけれど鄙の荒野は猶ひろくして

田家水

賤の女が朝菜あらひしあとながら田川の水はにござりけり

ひきいれむ水も心にまかせたる山田はしづもりよかるらむ

田家夕

あげまきも牛ひきつれてかへりきぬ夕餉の煙見ゆるわらやに

田家翁

子等は皆いくさのにはに出ではてゝ翁やひとり山田もるらむ

故郷庭

池水に小舟うかべてあそびつるむかじこひしきふるさとの庭

故郷庭草

昔わがあつめし草の根はたえてあさぢむぐらのしげる庭かな

關

あふさかの關の岩かどもる人のなき世となりて年もへにけり

朝海

波のうへに朝日にほひてかゞみなす青海原は明けはてにけり

海上雲遠

遠山のあらはれたりと思ひしは沖にうかべる雲にぞありける

船中見島

うしろにはいつなりにけむ漕ぐ舟のゆくへ遙に見えし島やま
さきに見し島は後になりにけりわが乗る舟のはやさ知られて

川

岩がねをきりとほしても川水はおもふところに流れゆくらむ

河水流清

五十鈴川きよきながれの末くみてこゝろを洗へあきつしま人

瀬

さゞれさへゆく心地して山川の淺瀬の水のはやくもあるかな

舟

大八洲まもらむ舟のとしぐに數そふ世こそうれしかりけれ

蘆間舟

とる棹のこゝろ長くぞ漕ぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも

薄暮眺望

家なしと思ふかたにも燈火のかげ見えそめて日はくれにけり
夕やけの空のけしきぞうるはしきみどりはてなき松原の上に

望遠帆

追手にや吹きかはりけむわたの原おきの白帆の遠ざかりゆく

深夜燈

寢覺して見れば枕のもと照すともし火くらし夜やふけぬらむ

窓燈

高殿の窓にかゝぐるともし火は月なき夜こそさやかなりけれ

植物園

我園にしげりあひけりをつくにの草木の苗もおふしたつれば

富士山

富士のねの見えそめしこそうれしけれ東路さして歸る旅路に

石

あまだりにくほめる石を見ても知れ難き業とて思ひすてめや

草

種なくてひとり生ふるはうつせみの人の心のものわすれぐさいぶせしと思ふなかにもえらびなば薬とならむ草もこそあれ

松

雲の上にたちさかえたる山松のたかきにならへ人のこゝろも雪にたへ嵐にたへしのちにこそ松のくらゐもたかく見えけれ

しら雲をしのがむ山の松原はわか木なれども木だかゝりけり

孤島松

浪たかき沖の小島のひとつ松いつの世にかも根ざしそめけむ

淵底古松

世の中のあらしを知らぬ谷底の松はしづかに千代をへぬべし

松年久

ふるさとの大木の松はをさなくて見し世ながらの緑なりけり

柚木

わたらひの宮木とならむ柚山は若木のかげも木だかゝるらむ

埋木

水底にしづみはてたる埋木もあらはれぬべきときや待つらむ

石垣のひまに生ひたる吳竹は千代をつらぬくねざしなるらむ
笛となり弓矢となりて吳竹の世はさまぐにかはりけるかな
窓の戸をあけくれ見れどあかれぬはなほかる竹の姿なりけり

窓前竹

わらはべが學の窓のくれ竹のとしくしげくなるぞうれしき

鶴

もゝ鳥の中にまじりてあされどもたづの姿はゆたかなりけり

蘆間鶴

すだちにし雛あさらせてひとつがひたづぞおりたつ浦の蘆原

雪中鶴

雪はれて月さしわたる松原に子をおもふたづの聲のきこゆる

庭上鶴

こゝのへの雲居の庭の廣ければ放たぬたづもすみなれにけり

鶴思子

前になりうしろになりて雛まもるたづの心のあはれなるかな

雀

わらはべに追はれしならむ群雀あわたゞしくも鳴きかはすなり

籠中鳥

面白くさへづる鳥ぞあはれなるふせこの中をおのがよにして

牛

つはもののかてもまぐさも運ぶらむ牛も軍のみちにつかへて

馬

たゝかひのいとまある日は軍人手なれの駒をいつくしむらむ
久しくもわが飼ふ馬の老いゆくを惜むは人にかはらざりけり
とりどりにいさむ若駒いづれをかわが廐にはひかむとすらむ

駒

うちのりて雪の中道はしらせし手なれの駒も老いにけるかな

猿

子をつれて遊ぶを見れば山猿も人のこゝろにかはらざりけり

鯨

潮けぶりたつといふなりとほつひと松浦のおきに鯨よるらし

蝸牛

さゝやかに見ゆる家にもかたつぶり獨すむには事たりぬべし

民

千萬の民よこゝろをあはせつゝ國にちからをつくせとぞ思ふ
ほどくに心をそぐあがたゐの水にうるほふ四方の民ぐさ
もろともにたすけあひつゝ國民の睦びあふ世ぞ樂しかりける
國民のことばの花をわが窓につどへて見るがたのしかりけり

人

さかしきもおろかもあれど人ごとにあらまほしきは誠なりけり
人はたゞまことの道を守らなむ高きいやしきしなはありとも

老人

杖つきて道ゆくまでに老いし身も昔たづぬるしをりとぞなる

老の波かづくにつけて思ふらむ浮きつ沈みつわたりこし世を
おとろへしさまは見えねど老人は涙もろくもなりまさりけり
つく杖にすがるともよし老人の干とせの坂をこえよとぞ思ふ

親

國のためたふれし人を惜しむにも思ふは親のこゝろなりけり
たらちねのみおやの教あら玉の年ふるまゝに身にぞしみける
たらちねの親の心をなぐさめよ國につとむるいとまある日は
ひとりたつ身となりし子ををさなしと思ふや親の心なるらむ
たらちねの親の心はたれもみな年ふるまゝにおもひしるらむ
むらぎもの心つくしてむくいなむおふしたてたるおやの恵に
すくよかに家をも身をも修めつゝ老いたる親のこゝろ休めよ

子

思ふことつくるふこともまだ知らぬをさな心のうつくしき哉
思ふこと思ふがまゝにいひいづるをさな心やまことなるらむ
たらちねの親の教をまもる子はまなびの道もまどはざるらむ
すゝみたる世に生れたるうなるにも昔のことをまづ教へなむ

友

あやまちをいさめかはして親しむがまことの友の心なるらむ
あやまちを諫めかはして國のため力をつくせますらをのとも

賤

おのが身を修むる道はまなばなむしづがなりはひ暇なくとも

樵夫

柴人は身をかるげにもほりけりふみわけがたく思ふ山路を

島漁夫

漕ぎかへる小舟を見れば小島にも蟹が苫屋やおほくあるらむ

寶

あしはらの國富まさむとおもふにも青人草ぞたからなりける
傳へきて國の寶となりにけりひじりの御代のみことのりぶみ
神代よりうけしたからをまもりにて治めきにけり日の本つ國
世の中に獨立つまでをさめえしわざこそ人のたからなりけれ

劍

ますらをが常にきたひし劍もて向ふしこぐさなぎつくすらむ

軍刀

きたひたる劍のひかりいちじるく世に輝かせわがいくさびと

太刀

あだし野にいざ輝かせますらをがときすましたる太刀の光を
身にはよし佩かずなりても劍太刀ときなわすれそやまと心を

鏡

柳葉にかけし鏡をかゞみにて人もこゝろをみかけとぞおもふ
うちむかふたびに心をみかけとやかゞみは神の造りそめけむ
國といふ國のかゞみとなるばかりみかけ丈夫やまとだましひ

玉

あまりにも磨かむとして言の葉の眞玉にきずをつけてける哉
くもりなき心のそこの知らるゝは言葉の玉のひかりなりけり

人皆のえらぶが上もえらびたる玉にもきずのある世なりけり
きずなしといはれむ玉を拾はむと言葉の海にたゝぬ日もなし
しら玉を光なしともおもふかなみがきたらざることを忘れて

家

ことそぎし昔の家のつくりざま今もゐなかにのこりけるかな
年の名をしるす瓦にいにしへの家づくりこそおもひやられるれ
親も子もしたしみかはし家の内の賑はへるこそ世は樂しけれ

賤家

假庵をかるくつくりてしづのをはいたる處に身をつくすらむ
しづが住む藁屋のさまを見てぞ思ふ雨風あらしき時はいかにと

柱

まきばしらたてし心をうごかすな世には嵐のふきすさぶとも
眞木柱たちさかゆるもうごきなき家の主人のあればなりけり
かしはらのとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

瓦

なにがしの寺の文字ある古瓦たまにならべてかざりけるかな

机

よりそはむひまはなくとも文机の上には塵をすゑずもあらなむ

筆

國のためふるひし筆のいのち毛の跡こそ残れよるづ代までに
心してとりにし筆のいのち毛のあとこそこのれ長き世までに

墨

うるはしき筆の林になびかずば松のけぶりもかをらざらまし
書

心なくかきながしたる水莖のあととはづかしくおもはるゝかな
上つ代のことをつばらに記したる書をしるべに世を治めまし

讀書

今の世に思ひくらべていそのかみふりにし書を讀むぞ樂しき

時計

時はかるうつはの針のともすればくるひやすきは人の世の中
時はかるうつははまへにありながらたゆみがちなり人の心は

盃

しづかにも世はをさまりてよろこびの盃あげむ時ぞまたるゝ

團扇

あをによし奈良の團扇は都にてありし時にやつくりそめけむ

藥

へだてなくめぐみの露をかくるこそ青人草のくすりなりけれ
心ある人のいさめの言の葉はやまひなき身のくすりなりけり
いかならむ藥すゝめて國のため痛手おひたる身をすくふらむ

車

くつがへることもこそあれ小車の進むにのみは任せざらなむ
人の手にひかする車つくりけむ駒のかよはぬみちゆかむとて

杖

竹馬に乗るわらはべよ老のさか越えゆくおやの杖とならなむ

心

ともすればかきにごしけり山水のすませばすますひとの心を
しきしまの大和心を、しさはことある時ぞあらはれにける
山を抜く人のちからも敷島のやまとごゝろぞもとゐなるべき
ことなしとゆるぶ心はなか／＼にあだあるよりも危かりけり

忠

うつせみの世は安らかにをさまりぬわれをたすくる臣の力に

誠

鬼神も泣かするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

道

ならびゆく人にはよしや遅るとも正しき道をふみなたがへそ

いそのかみふることぶみは敷島の大和言葉のしをりなりけり
いとまあらば踏分けてみよちはやぶる神代ながらの敷島の道
のぼるかど見ればくだりてたはやすく進みがたきは敷島の道
たてつめし市の家居のうちにはさへ道やあるらむ人のかよへる
世の中にあやふき事はなかるべし正しき道をふみたがへずば
事しげき世にふる人もわが好む道にわけ入るひまはありけり

仁

國のためあだなす仇はくたくともいつくしむべき事を忘れそ

武

弓矢もて神のをさめし國人はことをき世にもこゝろゆるぶな

樂

千萬の民とともにたのしむにます樂しみはあらじとぞ思ふ

行

世の中の人のつかさとなる人の身のおこなひよ正しからなむよしあしを人の上にはいひながら身をかへりみる人なかりけりわれとわが心をりくかへりみよ知らずくも迷ふことあり易くしてなしえがたきは世の中の人の人たるおこなひにして世の人を教ふこともかたからむ身の行ひのたゞしからずば

義

おのが身をかへりみずして人のためつくすや人の務なるらむ

心靜延壽

むらぎもの心をひろくやしなはなながき齡もたもたざらめや

夢

たらちねの親の御前にありとみし夢の惜くもさめにけるかな

教育

たゞしくも生ひしげらせよ教草をとこをみなの道をわかちて

教

ともすればあらぬ方にとふまよひ教へがたきは人の道なり今はとてまなびの道に怠るなゆるしのふみを得たるわらはべ

庭訓

たらちねの庭の教はせばけれど廣き世に立つもとゝはなれ

勉強

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ思ひ入りたる道のためには

手習

をさなごがならへば習ふほど見えて清くなりゆく水莖のあと
幼児がもの書くあとを見ても知れ習へば習ふしるしある世を
すゝむべき筆先しるし幼児がてならふ文字はつたなければども
竹馬にこゝろの乗りて手習におこたりしよをいまおもふかな

歌

思ふことうちつけにいふ幼児の言葉はやがて歌にぞありける
こともなくしらべあげたる言の葉の花にぞ匂ふ國のすがたも
思ふ事ありのまにくつらぬるが暇なきよのなぐさめにして
天地もろごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな
まごゝろをうたひあげたる言の葉は一度きけば忘れざりけり

まごゝろを限なき世にとむるも大和言葉のいさをなりけり
すなほにてをゝしきものは敷島の大和言葉のすがたなりけり
むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき
なか／＼に深き根ざしの見ゆる哉はかなしと思ふ言の葉草に
うつせみの人のまことを萬代にのこすや歌のしらべなるらむ

詞

言の葉の花のいろこそかはりけれおなじ心のたねと聞けども
言の葉の道をや神のひらきけむ人のこゝろをなぐさめよとて
言の葉につらねられぬぞくちをしき心に思ふことはあれども

送別宴

盃をかたみにあげて旅に出づる人のかどでをいはひけるかな

旅

旅にあれば物も思はずこゝかしこかはるけしきに心うつりて

海外旅

白雲のめぐりくゞてさまゞの國のすがたも見てかへるらむ

旅宿

いなづまをひきし火影も見ゆるかなあがたの里も年に開けて

旅宿曉

小車のおとぞきこゆる旅やかたあけぬに出づる人やあるらむ

旅宿雨

草まゝら旅のやどりにつきて後うれしく雨のふりいでにけり

旅泊重夜

波風のあらしといひて今夜又おなじみなとにうき寝をぞする

旅行友

及ばぬをたすけあひつゝ思ふ友おなじまなびの旅に出づらむ

龍驤艦に召して海路京都へ行幸のをり志州鳥羽港

に風浪を避けたまひし翌朝よませたまへる

浦風もあらいなみも今朝なきてかもめ飛びかふ鳥羽の海面

軍艦に召して佐世保に行幸のをりに

おもひきや小豆の島の朝霧にゆくさき見えずなりはてむとは

同じをりに

なるかみの音はげしくも雨ふりて部崎の波に夜をあかすかな

述懐

照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草の上はいかにと
曉のねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかゝあらむと
世の中はたかき賤しき程々に身をつくすこそつとめなりけれ
末つひにならざらめやは國のため民のためにとわが思ふこと
ことなくてをさまる世にも民のためおもふ心はやすむ時なし
千萬の民のこゝろもをさまらむまことひとつをもて教へなば
いにしへの書見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと
ことしあらば火にも水にも入らばやとおもふがやがて大和魂
國を思ふ道にふたつはなかりけり軍のには立つも立たぬも

夜述懷

夏の夜も寢覺がちにぞあかしける世のため思ふこと多くして

深夜述懷

軍人いかなる野邊にあかすらむ蚊の聲しげくなれるこの夜を

寄道述懷

しら雲のよそにもとむな世の人のまことの道ぞしきしまの道
言の葉のまことの道を月花のもてあそびとはおもはざらなむ
ふむ人はあまたあれども言の葉の道のたかねは誰かこゆらむ
しるべする人をうれしく見出でけりわが言の葉の道の行手に

寄山述懷

久方の空に晴れたるふじのねのたかきを人のこゝろともがな

寄水述懷

世はいかにくだりゆくとも河水のにごらざらなむひとの心は

寄草述懷

むらぎもの心をたねのをしへ草おひしげらせよやまと島根に

寄松述懷

千とせにはあえずともよし常磐なる松の操にならひてしがな

正述心緒

たゝかひの爲にちからをつくしたる民の心をやすめてしがな

四海兄弟

四方の海みなはらからと思ふ世になど波風の立ちさわぐらむ

思往事

たらちねのみおやの御代に仕へたる人も大方なくなりけり

たらちねの御祖の御代は白雲の四十路のよそになりける哉

披書思昔

しばらくはをさな心にかへりけり讀み習ひにし書をひらきて

披書知昔

あらはしゝふみを教となしにけりむかしの人の聲はきかねど

夢見故人

したはしとおもふ心やかよひけむむかしの人ぞ夢にみえける

神祇

目に見えぬ神のこゝろにかよふこそ人の心のまことなりけれ
くもりなき人の心はちはやぶる神はさやかにてらし見るらむ
目に見えぬ神にむかひて恥ぢざるは人の心のまことなりけり
わが心およばぬ國のはてまでもよるひる神はまもりますらむ

ためしなく開けゆく世を見ることも導く神のませばなりけり
國民のひとつごゝろにつかふるも御祖の神のみめぐみにして
あさなくみおやの神に祈るかなわが國民をまもりたまへと
世の中のことある時に世を守る神のみいづはあらはれにけり
社頭水

まうでくる人のこゝろをあらひけりみたらし川の水のしら波
軍旗を授けたまひて

ますらをに旗をさづけて思ふかな日のもとの名を輝かすべく

靖國神社に行幸のをり

神垣になみだ手向けてをがむらしかへるを待ちし親も妻子も

高山彦九郎正之をおぼしめして

國のため心つくし、たか山のいさをむなしくはてしあはれさ

御苑の稚松を山縣公に賜りて

おくりにし若木の松のしげりあひて老の千年の友とならなむ

三條太政大臣の奉りしたきものすぐれたるをめで

でたまひて

こゝのへのくもゐに匂ふたきものかをりに君が心をぞしる

明治十二年八月十八日岩倉右大臣の邸に行幸のを

り庭の木々にともし火をかけつらねたるを見たま

ひて

かぎりなくかけつらねたるともし火のうつるも涼し庭の池水

折にふれて

開けゆく道に出で、も心せよつまづくことのある世なりけり
 くるがねのまと射し人もあるものをつらぬきとほせやまと魂
 世の中の人におくれをとりぬべし進まむ時にすゝまざりせば
 家とみてあかぬことなき身なりとも人の務をおこたるなゆめ
 國民の力のかぎりつくすこそわが日のもとのかためなりけれ
 わけばやと思ひ入りぬる道にこそたかき葉も見えそめにけれ
 思ふこと思ふがまゝになれりとも身をつゝしまむ事を忘るな
 國のためいよくつくせ千よろづの民の心をひとつにはして
 何事も思ふがまゝにならざるがかへりて人の身のためにこそ
 駒に乗るわざはいくばく進むともつまづくことを省みよかし
 波風のしづかなる日も舟人はかぢにこゝろをゆるさゝるらむ

妨ぐる何はありともおもひいる道にまよふなますらをのとも
 若竹のおひゆく末をおもふ世に庭のをしへをおろそかにすな
 物まなぶ道にたつ子よ怠りにまされるあだはなしと知らなむ
 いそのかみ古きためしを尋ねつゝ新しき世のこともさだめむ
 わが國は神のすゑなり神まつるむかしのてぶり忘るなよゆめ
 思ふこと貫かむよを待つほどの月日は長きものにぞありける
 ちはやぶるかみの心にかなふらむわが國民のつくすまことは
 上つ代の御代のおきてをたがへじと思ふぞおのが願なりける
 ともすればうきたちやすき世の人の心の塵をいかでしづめむ
 ともすれば人をおそしと思ふかな身の怠りはかへりみずして
 世は安くをさまりぬとて世の人のゆるぶ心ぞあだとなるべき

すなほなる人の心にくれ竹のまがれるくせはいつかつきけむ
ちはやぶる神ぞしるらむ民のため世をやすかれとおもふ心は
山のおく島のはてまで尋ねみむ世にしられざる人もありやと
しら露のおきふしごとと思ふかな民の草葉のさかゆかむ世を
及ばざることな思ひそうつゝみの身は程々のありけるものを
むらぎもの心のかぎり盡してむわが思ふことなりもならずも
ひろき世にまじはりながらいかなれば狭きは人の心なるらむ
おこなはむ時にあたりて迷ふその人の心のをしくもあるかな
うつゝみの人の心のおこたりにまされる仇はあらじとぞ思ふ
神路山みねのまさかきこの秋はみづから折りてさゝげまつらむ
千萬の仇をおそれぬますらをもこの暑さにはたへずやあるらむ

端居して月見るほどもたゝかひの場のありさま思ひやりつゝ
勇みたつ心の駒をひきとめていたでおふ身やわびしかるらむ
夢さめてまづこそ思へいくさ人むかひし方のたよりいかにと
いしだゝみかたきとりでも軍人身をすてゝこそうち碎きけれ
おもほえず夜をふかしけり國の爲斃れし人のものがたりして
湊江によるづ代よばふ聲すなりいさををつみし舟や入りくる
世とともにかたりつたへよ國のため命をすてし人のいさをは
をりくゝにおもひぞいつる國のため心くだきし人のむかしを
かちどきの響くにつけてむらぎもの心たゆむなわがいくさ人
かぎりなき世に残さむと國のため斃れし人の名をぞとゞむる
いさがある人を教のおやにしておふしたてなむ大和なでしこ

しきしまの大和島根のをしへぐさ神代のたねの残るなりけり
 立ちかへる年の光をためしにてみちある御代の國はうごかじ
 春秋の花にもみちに戀しきはむかし住みたるみやこなりけり
 おのがじ、務ををへし後にこそ花のかげには立つべかりけれ
 つはものゝ心とともに乗る駒もつかるゝしらでいや進むらむ
 いつくしとめでのあまりに撫子にはの教をおろそかにすな
 なには江のそのよしあしもまだしらぬをさな心や誠なるらむ
 千代よばふ聲ぞにぎはふ山松のつらなる枝のひろきそのふは
 思ふにはまかせずとても人心たひらかにこそあらまほしけれ
 いかならむ事にあひてもたゆまぬはわがしきしまのやまと魂
 常に身のやしなひぐさを摘みてこそ人の齡はのぶべかりけれ

ひらけゆく時にいよ／＼仰がれぬひじりの御代のたかき教は
 あまさかる鄙のはてまでしげらせむわが敷島のみちをしへ草
 言の葉の數よみしてもみつるかなわがまつりごと暇ある日に
 思ふこと思ひさだめて後にこそ人にもかくといふべかりけれ
 國民の上もこゝろにまかせぬは雨とあらしのうれひなりけり
 花になり實になる見れば草も木もなべて務のある世なりけり
 うつせみの世のため進む軍には神もちからをそへざらめやは
 臥す龍の岡のしらゆきふみわけて草のいほりをとふ人やたれ
 理とまづ聞くものはうつゝみのよをさとりたる人のことのは
 神代よりうけつぎし世はうみの子の末の末まで榮えゆくらむ
 子を思ふ夜半の鳥のいねがてにあくるおそしと鳴き渡るらむ

寄國祝

國民はひとつごゝろにまもりけり遠つみおやの神のをしへを
さだめにしそのはじめより葦原の國のさかえは神ぞもるらむ
よろこびをいひかはしつゝ國々の治まる時にあふぞうれしき

寄道祝

あし原のみづほの國のよろづ代もみだれぬ道は神ぞひらきし

寄日祝

さしのぼる朝日のかげを鏡にて世をくまもなく照してしがな

寄星祝

くもりなき世をまもるらむ大空につらなる星の影さやかにて

寄花祝

をさまれる世の春風をうけてこそ花も長閑に咲きにほひけれ

祝言

うけつぎし國の柱のうごきなくさかえゆく世をなほ祈るかな

新年歌御會始御製

春風來海上 明治二年

千代よろづかはらぬ春のしるしとて海邊を傳ふ風ぞのどけき

春來日暖 同三年

吹く風ものどかになりて朝日かげ神代ながらの春を知るかな

貴賤迎春 同四年

をさまれる世々のためしを都人ひなもるともにいほふ春かな

春光日々新 同五年

日にそひてけしきやはらぐ春風のよもの草木にいよゝ吹かせむ

新年祝道 同六年

年たちて祝ふにいとゞすぐなれと我世の道をおもひけるかな

迎年言志 同七年

祝ふぞよつかふる人もほどくの道にたがはぬ年のはじめを

都鄙迎年 同八年

都にもとほき里にもあたらしきおなじ年をばうちむかへつゝ

新年望山 同九年

あたらしき年をむかへて富士のねの高き姿をあふぎ見るかな

松不改色 同十年

ふかみどり色もかはらぬ松が枝にときはかきはの末祝ふなり

鶯入新年語 同十一年

あたらしきとしのほぎごとといふ人におくれぬ今朝の鶯のこゑ

新年祝言 同十二年

あらたまの年もかはりぬ今日よりは民の心もいとゞひらけむ

庭上鶴馴 同十三年

なれくへてへだて心もなかりけりわがこゝのへの庭にすむ鶴

竹有佳色 同十四年

うゑおきし庭の吳竹よゝをへてかはらぬ色のたのもしきかな

河水久澄 同十五年

昔よりながれたえせぬ五十鈴川なほ萬代もすまむとぞおもふ

四海清 同十六年

沖つ波よりくる舟もとしどにかずそふ世こそ楽しかりけれ

晴天鶴 同十七年

富士のねも遙に見えてあしたづのたちまふ空ぞ長閑なりける

雪中早梅 同十八年

ふりつもるこそゑの雪をはらはせて今朝こそ見つれ梅の初花

緑竹年久 同十九年

九重のうてなの竹のふかみどりはらはらぬかげぞ久しかりける

池水浪静 同二十年

池水のうへにもしるし四方の海なみしづかなる年のはじめは

雪埋松 同二十一年

海原はみどりに晴れて濱松のこそゑさやかにふれるしらゆき

水石契久 同二十二年

さゝれいしの巖とならむ末までも五十鈴の川の水はにごらじ

寄國祝 同二十三年

あらたまの年をむかへてよろづ民ひとつこゝろに國祝ふらし

社頭祈世 同二十四年

とこしへに民やすかれと祈るなるわが世をまもれ伊勢の大神

日出山 同二十五年

山の端にかゝれる雲もはれそめてのぼる朝日の影のさやけさ

巖上龜 同二十六年

うごきなき秋津しまねの岩のうへに萬代しめて龜はすむらむ

梅花先春 同二十七年

春風も吹くこゝちしてあらたまのとしの初日ににほふ梅かな

寄山祝 同二十九年

天の下にぎはふ世こそたのしけれ山のおくまで道のひらけて

田家煙 同三十二年

小山田の里の煙もとしづくに立ちそふ世こそたのしかりけれ

松上鶴 同三十三年

風の音はしづまりはてゝ千代よばふ田鶴がねたかし峰の松原

雪中竹 同三十四年

この上に幾重ふりそふ雪ならむたかむら高くなりまさりつゝ

新年梅 同三十五年

たちかへるとしの朝日に梅の花かをりそめたり雪間ながらに

新年海 同三十六年

あづさ弓やしまのほかも波風のしづかなる世の年たちにつけり

巖上松 同三十七年

苔むせる岩根の松のよろづよもうごきなき世は神ぞまもらむ

新年山 同三十八年

富士のねに匂ふ朝日もかすむまで年立つそらの長閑なるかな

新年河 同三十九年

あらたまの年たちかへる川波にしめかざりせし舟も見えけり

新年松 同四十年

あたらしき年のほぎごと聞くにはによろづ代よばふ軒の松風

社頭松 同四十一年

常磐なる松こそたてれうごきなき國をしづめの神のやしるに

雪中松 同四十二年

としづに雪をかさねて老松のみさを高くもなりまさりけり

新年雪 同四十三年

田に畑に雪ぞつもれる民のためゆたかにと思ふ年のはじめに

寒月照梅花 同四十四年

照る月のひかりはいまだ寒けれど春にかはらぬ梅が香ぞする

松上鶴 同四十五年

朝づく日とよさかのほる山松の木末をしめて田鶴ぞなくなる

歴代御製集卷二十四 終

大正四年五月十五日印刷
大正四年五月三十日發行

芙蓉會 々長

伯爵田中光顯

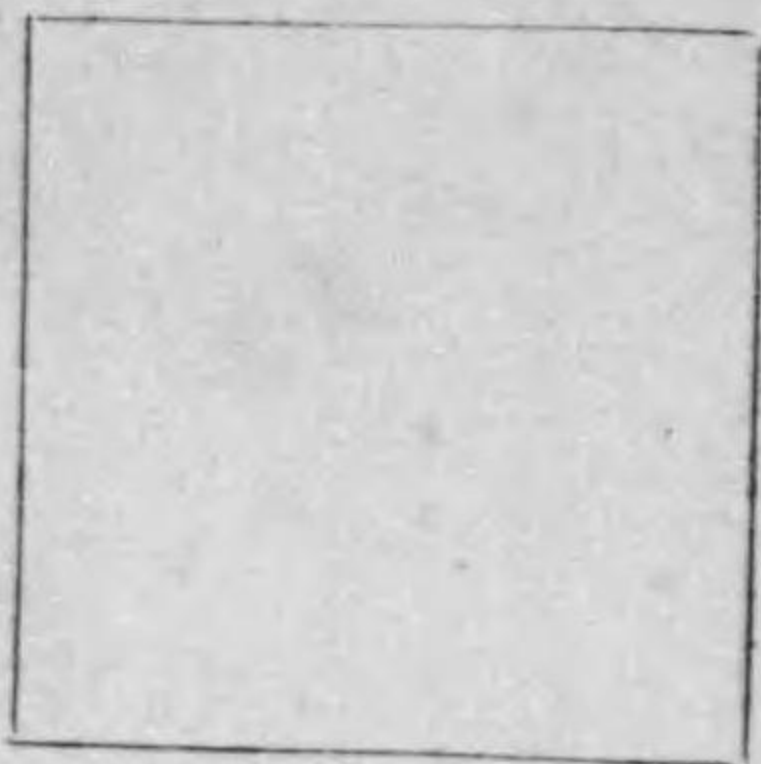
芙蓉會編輯主任

編輯者 池邊義象

芙蓉會出版主任

發行兼印刷者 林縫之助

東京市京橋區鈴木町十二番地



發行所

東京市京橋區鈴木町十二番地

芙蓉會

328
372



終